

# 総称文に関する覚え書き

---

福 沢 清

---

## 0. はじめに

本論は、一般に総称文 (Generic Sentences) と呼ばれる文の特質を些かなりとも明確にしようという試みである。伝統文法において、特に、Jespersen では (1) のような総称に関する用語が使用されている。

- (1) a. generic article (Jespersen, 1924: 203; 1933: 166-7; 1909-49: vol. 7: 424-5.)
- b. generic number (1924: 203-5; 1933: 212-4; 1909-49: vol. 1. 2. 131-5.)
- c. generic person (1924: 142-3, 161, 167, 204, 215-7; 1933: 150-1; 1909-49: vol. 7: 152-62.)
- d. generic time (1924: 259, 279-81; 1909-49: vol. 4. 17-8, 74, 366-7.)

ここで注目したいのは、不思議なことではあるが、「総称文」の定義がなされていない、ということである。このことは、筆者の知る限り、他の伝統文法学者や構造言語学者、そして今日の生成変形文法学者についても同様である。

具体例をみていくことにしよう。

- (2) a. *The sun rises in the east.* [Dahl, 1975]
- b. *The Ohio River flows into the Mississippi.*
- c. *Rome stands on the River Tiber.*

(2) の各主語名詞句は、唯一無二といわれる指示物をもつ名詞句、固有名詞 (句) である。一般に、総称名詞句とは、「いわゆる馬というものは…」という日本語に示されるように、動植物などの種類・種族のクラスを総称して述べるものである。が、大事なことは、当該クラスを構成する個々の成員は、各々、異なり、その指示物是非特定のである、ということである。(2) のよ

うな文は、たしかに、いわゆる総称時をもっている点で、総称的ではあるが、その主語名詞句は指示的に透明な指示物を持ち特定のなので総称名詞句ではないことになる。

同様に、総称名詞句ではない、主語名詞句の一般的特性を述べている(3)のような文もある。

- (3) a. *Nephi's dog chases cars.*  
 b. *Delmer walks to school.*  
 c. *John smokes cigars.*  
 d. *I write with my left hand.* [Dahl, 1975]

(3)の主語名詞句は、(2)と異なり、個別的で一般性の度合いが低い。このことは文のトピックになりにくい、ということを含意する。総称名詞句は、通例、既知項目で旧情報を示すことを考えると、(3)より(2)の方が総称名詞句に近い、といえよう。

さらに、主語名詞句は総称的ではないが、一般的真理を表わすものとして(4)のような文が挙げられる。

- (4) a. *Some tennis balls serve better than others.* [Fiengo, 1980: 49]  
 b. *Some violets smell.*  
 c. *Few birds swim.*

特に、(4) a は *some* と *others* という語が対比されているため、結局、テニスボール全体に言及していることになるが、依然として、その一部の特性を述べていることにかわりはなく、存在構文の一種と見做すべきである。

以上のことから、本稿で総称文というとき、(特定の)個別主語についての習慣的・反復的動作を示す文や、一般的ではない個別主語についての定義文・規範文(*gnomic sentences*)、さらに、それについての一般的真理を表わす文などは、総称文から除外することにする。もっと簡潔にいうなら、「総称文とは、総称主語名詞句についての一般的特性を表わす文」ということになる。しかし、このことは、総称名詞句が統語的にどの位置にも生起しうる可能性を排除するものではない。例えば、(5)の文の *the beaver* は総称名詞句となりえても文全体では総称文ではないということである。

- (5) *John is writing an article on the beaver.*

## 1. トピック性

総称名詞句は、(5)が示すように、統語的にどの位置にも生起しうるが、もっともよく生ずる位置は文頭である。これは、総称名詞句が、通例、既知項目で旧情報を表わすからである。つまり、総称名詞句の記述内容の一般性はきわめて高いので、文のテーマづけを担う文頭とよく整合するのである。動詞が心的態度や状態 (mental attitudes/state) を表わす場合を除けば、目的語の位置は、通例、総称的ではない、という事実がある。しかしながら、このような目的語も話題化変形をうけて文頭に生ずると総称的になる。

- (6) a. *Robins build nests.* [-universal]  
 b. *The/a mouse fears cats.* [+universal]  
 c. *Beavers people seldom eat  $\phi$ .* [+universal]  
 d. *The/a beaver people seldom eat  $\phi$ .* [+universal]

ただし、(6) a の目的語は総称的でなくても、文全体としては総称文である、ことには注意すべきである。なぜかという、主語が総称的で述語がその主語名詞句についての一般的特性を表わしているからである。

このトピックという観点からみると、次の (7) の文でイタリック体の目的語名詞句が総称的であるのも文頭の位置に生起しているためと考えられる。

- (7) a. *Why do you want it in money rather than goods?*  
 b. *Money I can hide  $\phi$ , goods I can't  $\phi$ .*

## 2. 総称的文脈

トピックということに加えて、総称的文脈というものが総称文の決定に関与することを指摘したい。総称名詞句は、異なる個々の成員からなるあるひとつの集合を包括的に表わすが、その個々のメンバーは非特定のである。この点において総称名詞句は、指示的に不透明 (referentially opaque) ということができよう。以下、この不透明な指示を生み出す言語的環境を「総称的文脈 (generic context)」と呼ぶことにする。そうすると、個別主語からなる (2) a, b, c の *the sun*, *the Ohio River* などは、指示的に透明であり、さらに、その中に異なる非特定のな成員をも含んでいないので総称名詞句とは異

なることが明確になる。総称名詞句が指示的に不透明であることは、それが、条件節を形成する *if* や指示的に不透明な *any* を用いてよくパラフレーズできるといふ事実によつて証明づけられよう。

- (8) a. *An abbreviation ends in a period.*  
 b. *If there are any such things as abbreviations, they must end in periods.*

文副詞も総称的文脈に関与することがある。

- (9) i) a. *Generally, a beaver is intelligent when it has blue eyes.*  
 b. ? *A bear is generally intelligent when it has blue eyes.*  
 ii) a. *Generally, bears are intelligent when they have blue eyes.*  
 b. *Bears are generally intelligent when they have blue eyes.*

(9) i) a のように、不定冠詞による主語名詞句が文副詞 *generally* の作用域内にあれば総称的解釈になるが、b のようにその影響をうけなければこの解釈は得られにくくなる。しかし、ゼロ複数名詞句は *generally* の位置にかかわらず総称的である<sup>1</sup>、ことには注意すべきである。ただし、

- (10) a. *Marines are only one branch of the services.*  
 b. *Suddenly, marines burst into the room and surrounded the company.*

(10) b が示すように、瞬時的一回きりの出来事を示す *suddenly* などは、全般的な意味をもつ *generally* などのような文副詞とは異なり、総称的解釈を与えない。それが主語名詞句に特定の解釈を与えることになるからである。さらに総称的文脈は、代名詞の性質や時制によっても左右されることがある。

- (11) a. *\*Expensive as butter which I bought yesterday was, it turned rancid.*  
 b. *Expensive as butter which one buys on Fridays is, it usually turns rancid.*

既に述べたように、「総称文は、総称主語名詞句についての瞬時的その場

<sup>1</sup> 不定名詞句と *generally* による総称性についての相互作用は、*seldom*, *always* などの場合、それが占める文中の位置にかかわらず、観察されない。

- a. *A child is seldom happy when/if his parents are divorced.*  
 b. *A dog is always intelligent when/if it has blue eyes.*

限りの事象ではなく、繰り返し行なわれる一般的事象を表わす文」である。このことは総称文の内容が、ある一定の永続性をもつということ、科学などにおける予測可能な性質をもつ可能世界の事象をも表わすことになり、いわゆる真理文との類似性もこのようにして生じてくる。このことから、総称名詞句は、発話時において必ずしも特定の指示物をもつ必要はない、ことになる。つまり、総称名詞句は指示的に不透明な文脈に生じやすいのである。

Jackendoff (1972: 309) の法構造 (modal structure) における法演算子 (modal operators) としての Gen は、彼がはっきりと述べているように、文のどのような統語的要素を含むのか明確でない。が、我々は総称的文脈を形成する統語的環境は何か、という方向からこの問いにアプローチしてみたい。

### 3. 叙述形容詞—tough 構文など—

述語が総称性に関与する例として (12) を考えてみよう。(A > B は A が B より作用域の広いことを示す。)

- (12) a. A senator is *anxious* to speak at every rally. (a > every)  
 b. A senator is *likely* to speak at every rally. (every > a)  
 [Ioup, 1975: 169]

(12) b は *likely* という不透明な文脈を形成する語があるために総称的読みをもちうるが、(12) a の *anxious* はそういう語ではないので非総称的で、このことが数量詞の相対的作用域の差となっている。つまり、主語名詞句が (12) a では特定のであるが、b では逆に非特定のである。ところでこの差異を上昇変形 (raising) を許す形容詞であるかどうかを求めることはできない。なぜかという、*anxious* と同じ消去 (deletion) 型であって上昇型ではない *silly* は、(12) のような構文で、上昇型の *likely* と同じくその主語名詞句は総称的読みをもつからである。

- (13) A senator is *silly* to speak at every rally. (every > a) [Ibid]

この差異は、*silly* と *likely* が *anxious* と異なり、いずれも文主語をとるためであるように私には思われる。(14) が示すように、前者 [*silly* と *likely*] はある命題についての話者の判断を表わすのに対し、後者の *anxious* は、ある行

為との関連のもとに、ある特定の人の気持ちについての話者の判断を示す。このことは、総称文が種類・種属の一般的判断を表わすのに関連している。以上のことから、総称文というのは、極端に言えば、主語名詞句が普遍限量詞的で広い作用域をとる場合ということになる。

- (14) a. It is *likely* that a senator will speak at every rally.  
 b. It is *silly* that a senator speak at every rally.  
 c. \*It is *anxious* that a senator speaks at every rally.

(15), (16) のような例からも、補文内から上昇された主語名詞句をもつ文が、即座に総称文であると断定できないことが示される。

- (15) a. It is a delight to talk to someone interesting.  
 b. #Someone interesting was a delight to talk to  $\phi$ .  
 c. Someone interesting *would be/is always* a delight to talk to  $\phi$  (at a time).  
 (16) a. It would be easy to kill a man/someone with a gun like that.  
 b. #A man/someone would be easy to kill  $\phi$  with a gun like that.  
 c. An elephant *would be* easy to kill  $\phi$  with a gun like that.

(15) a の someone interesting は総称・非総称で曖昧である。さらに、これが主文の主語名詞句の位置に上昇しただけでは総称の読みはえられない。(15) b のような過去時制による透明な文脈ではなく、(15) c のように would や always などの助けを借りて指示の不透明な文脈をつくるとこの主語に総称的読みがえられる。

(16) についてもほぼ同様なことがいえるが、b に総称的読みが得られにくいのは a man や someone がその固有の性質によって (non) specific にしかならないからである。つまり、総称的であれば  $\phi$  man, men となるのが普通であり someone だけでは常に非総称的である。

総称文は総称主語名詞句についての一般的命題を示すので、上記のいわゆる tough 構文は主語の一般的特性を示す点で<sup>2</sup> 総称的になりやすい、といえよう。

<sup>2</sup> tough 構文によって派生された主語名詞句がその一般的特性を表すことは、次の例が示すように、because 節の内容が主語名詞句の一般的・永続的性質・状態に言及する必要があることから示される。

i) Joe is impossible to talk to because...

## 4. 中間態 (Middle Voice)

主語の客観的特性を示すものに中間態 (middle voice), あるいは能動受動態 (activo-passive) と呼ばれる構文がある。これは、本来他動詞である動詞の目的語名詞句を主語の位置におき、形式としては能動態のまま受動態に相当する読みを表わす構文である。意味上、可能 (can) の意味をも含むこの構文は、広い意味で能格 (ergative) 表現といえよう<sup>3</sup>。具体例を Fiengo (1980: 49-50) などから引用するが、特に、主語名詞句の総称性に注目すると、(17), (18) のように分類できるものと思われる。

- (17) a. Clay tablets decipher with difficulty.  
 b. Pine saws well.  
 c. Clay shapes well.  
 d. Cheap bread dices unevenly.  
 e. Riches tend to accumulate.  
 f. Problems solve with difficulty.  
 g. Laces tear easily.  
 h. Cookies bake easily.

- 
- a) ...he's as stubborn as a mule.  
 b) ...\*he's out of town.  
 c) ...he's a *always* out of town.

- ii) It's impossible to talk to Joe because...  
 a) ...he's as stubborn as a mule.  
 b) ...he's out of town.

tough 構文の不定詞節に生起する間接目的語の主語への移動は、受身の場合を除き、英語の間接目的語が、通例、移動することができないという理由で、許されないといわれる。

- (iii) a. \*Mary is too easy to give  $\phi$  such a stupid job.  
 b. \*John is easy/difficult to give  $\phi$  bribery.  
 c. \*Harriet is tough to write  $\phi$  letters.  
 d. \*Harriet is tough to buy  $\phi$  clothes.

しかし、これだけの説明では、この構文の間接目的語の移動が許されている (iv) a や、tough 構文以外の不定詞節の間接目的語の主語への移動が許される (iv) b などを説明することができない。(iv) a についていうと、「但し、間接目的語に直接目的語が直結して後続しない場合は、その移動は許される」という補足が必要となる。このような事例を tough 構文が主語名詞句の一般的・恒久的特性を表わすという観点からみると、自然に (iii), (iv) は説明されるものと思われる。

- (iv) a. Mary is easy to teach  $\phi$  (\*swimming/\*mathematics).  
 b. Mary is a pleasure to teach  $\phi$ .  
 cf. He taught Mary swimming/mathematics.

- i. A person who isn't self-conscious photographs well.
  - j. A good tents puts up in about two minutes.
  - k. Muscles develops with exercise.
- (18)
- a. The book reads well/easily.
  - b. This pine smokes nicely.
  - c. The bicycle steers well.
  - d. The cloth shows well in the sun.
  - e. This paper does not tear easily.
  - f. The door won't lock/close/open.
  - g. This knife becomes rusty easily.

(18)はある特定の事物について言及している点で総称的な(17)とは異なる。が、いずれも主語の恒久的特性を述べ、内包的(intensional)で動作というより性質を表わす点では同じである。したがって、指示的に不透明な一もつといえは総称的な一文脈を形成している、といえる。

この構文の主語名詞句は、通常の主語とは異なり、純粹な動作主(agent)を表わさない。(19) aを除く各文は、明示されていない動作主の存在を含蓄するが、それは当該主語名詞句ではない、ことは明らかである。

- (19)
- a. They sell the book (well).
  - b. The book sells well/easily.
  - c. Detergents sell well.
  - d. The clothes washed easily.
  - e. The books sold easily.

---

<sup>3</sup> 中間態が可能(can)の意味をもつことは、次のパラフレーズ関係をみると明らかであろう。

- (i)
- a. It polishes easily.
  - =b. It is *possible* to polish it easily.
  - =c. Anyone *can* polish it easily.
  - d. The clock winds up (= *can* be wound up) at the back.

したがって、意味的冗長性ということから、この構文にcanは生じにくいことになる。ただし、他の法助動詞は自由にこの構文に生じうることに注意する必要がある。

- (ii)
- a. \*This bread *can't* cut easily.
  - b. \*This material *can* wash easily.
  - c. \*This book *cannot* sell like hot cakes.
- (iii)
- a. This knife does not cut well.
  - b. This knife *will* not cut.
  - c. This frozen meat *won't* cut.



## f. \*The floor cleaned willingly.

(19) a は動作主主語名詞句＋行為動詞であるが、b は a の動作主主語名詞句をとり除き、被動者 (patient) 主語名詞＋過程動詞となっている。Chafe(1970, 1974) の用語を借りれば、脱行為化 (Deactivative) が生じているのである。このことは、さらに (19) f が示すように、通例、動作主主語名詞句と共起しうする意図を表わす副詞がこの構文に生起しえないことから証拠づけられる。しかしながら、この構文の主語名詞句が純粋な被動者でもない、ということには特に注意すべきである。つまり、通常の動作受動態においては動詞によって示される行為が主語に及ぶのに対し、この構文の主語はこのように動詞の影響を直接受けるというのではなく、むしろ、動詞によって示される行為を行なう能力を潜在的にもっているのである。この構文は、主語名詞句自体が内在的にもつ固有の特性を動詞句で示し、当該主語名詞句は、ある程度、能動的動作主として機能しているといつてよい。この構文に属する (20) i) には、むしろ受動の意味が感じられないことからこのことは察知されよう。以上のことから、この構文には動作主を示す *by* 名詞句が生起しないこと、また、この構文の内容に対し、主語名詞句の特性以外の要因にその責任を帰することができないために、注2-i) のような文の容認可能性の相違が生じること、などが説明できるものと思われる。

- (20) i) a. Grass grows well.  
 b. The lawn plays well.  
 c. This pipe does not draw well.  
 ii) a. The book doesn't sell (\*by this salesman).  
 b. The new fiat sells well (\*by this salesman).  
 c. The fabric washes easily (\*by an experienced hand).  
 d. This material washes easily (\*by an experienced hand).

この構文と総称文との関係については、すでに述べた通りであるが、この点からもこの構文が指示的に透明な文脈に生起しえないことは明らかである。

- (21) a. \*The first edition exhausted *in three days*.  
 b. \*Caviare never eats *at five o'clock*.  
 c. \*The bread cut easily *yesterday*.  
 d. ?\*The music hear well *at the back of the hall*.  
 e. The book was selling/\*sold well *at the moment*.

通常の受動態の主語名詞句は中間態のそれと異なり、その潜在的な能力としての内在的特性を表わしにくく、また動詞によって示される行為を直接うけやすいので、総称的読みが得られにくい。仮に、総称的読みが通常の受動態の主語名詞句に与えられても、結果的には、語用論の観点から、真偽価値の点で偽としてそれらの文は排除されることが多い。

- (22) i) a. *Beavers* build dams. [generic]  
 b. *Dams* are built by beavers. [false]  
 ii) a. *Robins* build nests. [generic]  
 b. *Nests* are built by robins. [false]

この構文に生じうる動詞の制約もこの構文の主語名詞句の能格的潜在的性質から説明できる。

- (23) i) a. \*The book is *buying* like it going out of style.  
 b. This applesauce will \**eat/digest* rapidly.  
 c. \*The farm wagon *pulls* if we have a horse.  
 d. \*Pedestrians *hit* easily.  
 e. \*The baby *washes* easily.  
 ii) a. \*The wine *drinks*.  
 b. \*The clothes *wash*.  
 iii) a. The floor just *won't* clean.  
 b. Does he *discourage* easily?  
 c. The baby *bathes* easily.  
 d. A baby *washes* more easily than an armadillo.  
 [van Oosten, 1977]

つまり、(23) i)の動詞は、*digest*を除き、主語名詞句の潜在的な能力ともいふべき特性ではなく、それとは異なる動作主名詞句の関与を強く意識させる点で、能格的ではない。したがって、(23) i)の動詞のほとんどがこの構文に生じできないのである。

またこの構文にはよく否定辞や様態副詞が生ずるが、その存在は統語的に決定されるのではなく、自明なことは情報価値がないので情報量のある内容を伝達すべし、という会話の公準ともいふべき語用論的要因によって決定されるものと思われる。この観点から(23)のii)とiii)の容認可能性の差が説明される。このことは、これらが名詞を限定修飾する(24)ii)のような場合にも適用される。

- (24) i) a. This pipe smokes \*(well).  
 b. Rugs cleans \*(well).  
 c. Eggs poach (well).  
 ii) a. a \*(frequently) smoked pipe  
 b. a \*(well-) cleaned rug  
 c. (well-) poached eggs

[Fiengo, 1980]

この中間態に生起する動詞は、少なくとも know, want, see, hear, hope, resemble のような状態動詞ではない、ことを示唆する証拠がある。

Fraser (1974: 11) の指摘によると、状態動詞は不変化詞と結合しない。(hear out は命令文に生起することができるので状態動詞ではない。) が、この構文に生起しうる動詞にいわゆる二語動詞からなる一群がある。Kennedy (1967: 27) にその用例がある<sup>4</sup>。

- (25) a. A bill *figures up* to a certain amount.  
 b. Dirt on a garment will *brush/clean/rub off*.  
 c. Fresh bone will *grind up* easily.  
 d. A piece of cloth will *make up* nicely.  
 e. A sleeping person will *rouse up*.  
 f. A clock *winds up* easily.  
 g. Material *works up* well.  
 h. A chair *folds up*.  
 i. School *lets out*.  
 j. A plan *works out* well.

前にこの構文に用いられる動詞は他動詞の自動詞化されたものであると述べたが、その証拠として当該動詞に接頭辞 out- を付加できることをあげたい<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> (25) に用いられている up は、completive, perfective などと呼ばれ、(Fraser, 1974: 11), 他に、cake up, clog up, cook up, dent up, kind up, scuff up, streak up 等がある。状態動詞が能動受動文に生起しないという予測は、次の例によって確認される。

- a. \*These people *like* easily.                      d. \*His voice *heard* well.  
 b. \*The man *knows* well.                            e. \*Beautiful girls *love* well.  
 c. \*Stars *see* well at night.

<sup>5</sup> 不変化詞が付加されることにより、その厳密下位範疇化が変わるものは多いが、sleep, catch などの次のような例がある。

- a. He *slept off* the effects of the drinking.  
 b. He *caught on* quickly.

- (26) i) a. Rubber wears well.  
 b. Rubber *outwears* leather when used for shoe soles.  
 ii) a. Russian novels sell well.  
 b. Russian novels *outsell* French novels across the country.  
 iii) a. Front-wheel-drive cars handle well.  
 b. Front-wheel-drive cars *outhandle* all others in snow conditions.

なぜかという、out- は、通例、自動詞だけに付加できるからである。<sup>6</sup>

- (27) i) a. Mary *outlasted* John.  
 b. The lamp *outshines* the candle.  
 c. Few people *outgrin* the Cheshire cat.  
 ii) a. \*A big lumberjack can't always *outfell* a little one.  
 b. \*The Brownies *outfounded* the Girl Scouts in the treasure hunt.  
 c. \*Extroverts *outlike* introverts.

[Bresnan, 1981: 119, 1982: 169]

(27) i) のように自動詞に out- は付加されるが、(27) ii) のような他動詞にはこの付加は許されない。つまり、この中間態という構文の述語は主語名詞句の自発的行為を示しているのであって、けっして他のものに影響を及ぼしているのではない。またこの構文の述語は、主語の恒久的の特質を表わすので、通例、進行形と共起しないし、瞬時的副詞句とも整合しない。この構文に進行形が現れている時は、主語の特性というより、ほとんど偶発的といってもよい外的な現象面が強調されているのである。<sup>7</sup> さらに、一時的な目的を表わす

<sup>6</sup> 本来、他動詞であっても自動詞化されている用法には、接頭辞 out- の付加が可能となる。

- i) a. Mary *spend* freely.  
 b. Mary *guesses* correctly.  
 c. A centerfielder must *throw* well.  
 ii) a. Mary *outspent* John.  
 b. The Brownies *outguessed* the Girl Scouts in the contest.  
 c. Among ballplayers, the extroverts *outthrow* the introverts.  
 iii) At all ages, Russian children could *outdraw*, *outspell*, and *outread* their American counterparts.

[Bresnan, 1981: 119]

総称文との関連でいうと、i) c, ii) c, iii) は法助動詞や一定の期間を表わす副詞句と共起しているので総称的解釈が可能となる。

<sup>7</sup> 中間態および次で扱う再帰態が主語の特性(property)を表わす、というのは、次のパラフレズ関係が示している。

副詞句や節がこの構文に生じないことも予測される<sup>8</sup>

- i) a. The books *sold quickly*. = The books *sold themselves*.  
 b. = It was *by virtue of* some quality of the books that they were quickly disposed of.

このことは、(ii) a の単純形が形容詞に置き換えられるのに対し、進行形の b ではこれが許されない、ことと符合する。進行形は、通例、主語名詞句の一般的特性を表わしにくい言語形式といえる。

- ii) a. The fashion in love *spread widely* (= was popular).  
 b. The fashion in love *is spreading widely* (≠ was popular).

能動受動文の中に、(iii) のような、いわゆる能動分詞 (Active Participle) が含まれることがある。この形式はすでに化石化し、現代英語ではほとんど用いられない、とよくいわれるが、Buysens (1979) などから集めた (iv) のような用例があることから、必ずしもそうとばかり断定はできないものと思われる。(iv) はこの表現が、現代英語においても、料理、日常的言い回し、専門的慣用語句の中に、かなり、なお頻繁に使用されていることを物語っている。

- (iii) a. The house *is building* (= is being built).  
 b. = They are building the house.  
 (iv) a. The coffee *is making*. The cakes *are baking*. The tea *is brewing*. The eggs *are frying*. The cereal *is cooking* (now).  
 b. The piano has been a long time mending. The week's rent *is owing*.  
 c. The book *is binding*. The book *is (re)printing*.

この構文は、(v) が示すように、主語の特性を示さないものがあり、また、動作主を伴っているものもあるので、本稿で扱っている中間態からは除外することにする。(vi) はこの構文の制約のひとつとして、副詞句との共起制限のあることを示す。

- (v) a. A resolution *was forming* in his mind.  
 b. Snow *is blowing* (= is being blown).  
 c. A drunken boy *was carrying* (= was being carried) by our constable.  
 d. It *is still playing* in Broadway.  
 e. A big battle *was shaping up*.  
 (vi) a. The string *is* (always) *breaking* (\*tomorrow, \*these days).  
 b. The potatoes *are* (\*always) *cooking* (\*tomorrow, \*these days).  
 c. This (\*piece of, ?kind of) material *is* (\*always) *losing* it sheer (\*these days).

<sup>8</sup> 主文が受動文であるとき、その目的を表す不定詞節の主語の PRO の指示物は任意的である。

- (i) The books were sold [PRO to help the refugees].

この PRO の指示の任意性は、次の (ii) が示すように能動文においても可能であるが、自動詞構文においてはこれは許されない。

- (ii) a. They decreases the price [PRO to help the poor].

- (28) a. \*Russian novels *are reading* easily.  
 b. \*The book *sells at the moment*.  
 c. The book *is selling* well (*at the moment*).  
 d. This book *is selling like hot cakes*.

[Bresnan, 1981: 110/310; 1982: 171]

総称文というのは、単一のその場限りの出来事ではなく、繰り返し行なわれる、あるいはその可能性のある行為に言及するのであるから、能格表現の一種である中間態も総称的文脈を形成するといえよう。

総称文との類似性をもつこの構文の要因は、通例、表わされることのない by 名詞句を強いて示すなら、「誰にでもあてはまる」というような内容を表わす構文なので、「どの人にとっても」ほどの表現を補うことになろう。このことからこの構文が総称的文脈を形成していることは明らかである。

- (29) a. It polishes easily.  
 b. ≡ Anyone can polish it easily.

## 5. 再帰態

中間態に相当する意味内容をもつ再帰態について<sup>9</sup> Fiengo (1980: 52) から

- b. The price was decreased [PRO to help the poor].  
 c. \*The price decreased [PRO to help the poor].

したがって、受身文は動作主名詞句の存在の有無にかかわらず、動作主的 (agentive) であり、これと関連する構文はそうではない、と Chomsky (1981: 143, fn. 60) は述べているが、この点について、本稿で扱っている中間態は、「動作主的ではない」構文ということになる。が、このことは、総称文の中に目的節は、いっさい、生起しない、ということの意味するものではない。

- (iii)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{Everyone} \\ \text{Anyone} \end{array} \right\}$  can get in to see *Mary Poppins*.

<sup>9</sup> Poutsma (1926: 156-7) には、再帰態が通常の受動構文に接近するのは、主語名詞句が人を表わさないとときである、と述べられている。

- (i) a. *Some such impression conveyed itself* to the two men who were walking with Mrs. Reffold.  
 b. *Many points discover themselves* upon which opinion has changed during the 19 months' duration of the struggle.  
 c. Given stable international trade, *unemployment and the accompanying social troubles* will in large measure solve themselves.

用例を借用しながら考察することにする。主語名詞句の総称性に注目してその用例を分類すると、(30) (31) のようになる。(Fiengo は主語名詞句の総称性という観点からの議論はしていないことに注意すべきである。) 私は、この再帰態と通常の再帰代名詞の強調と再帰という二つの用法とを強勢や意味の観点から識別すべきことと、この再帰態と総称文との共有点を述べたい。

- (30) a. Wool rugs clean themselves.  
 b. Good wood waxes itself.  
 c. Foreign cars sell themselves.  
 d. Simple problems solve themselves.  
 e. A cat cleans itself.
- (31) a. That clay tablet deciphered itself.  
 b. The gears on his bicycle shift themselves.

再帰用法のときは、(32) が示すように強勢は再帰代名詞にはおかれぬ。他方、強意用法の場合、(33)–(35) が示すように強勢が代名詞におかれ、また、その再帰代名詞はそれと関係づけられる名詞句と同格的に並列することが可能である。ただし、主語名詞句が再帰代名詞の先行名詞句であれば、その代名詞は文頭・文中・文尾という副詞のよく生ずるどの位置にも生起できる。

- (32) a. \*They knew *themselves*. (if not contrastive) [reflexive use]  
 b. They kn<sup>ew</sup> *themselves*.
- (33) a. John did it *hims<sup>el</sup>f*. [emphatic use]  
 b. \*John d<sup>id</sup> it *hims<sup>el</sup>f*.
- (34) a. John *hims<sup>el</sup>f* did it. [emphatic use]  
 b. They *thems<sup>el</sup>ves* finished the job,
- (35) a. They finished the job *thems<sup>el</sup>ves*. [emphatic use]  
 b. \*They finished the j<sup>ob</sup> *thems<sup>el</sup>ves*.
- (36) a. I've never been there *mys<sup>el</sup>f*.  
 b. I *mys<sup>el</sup>f* have never been there.  
 c. I have never *mys<sup>el</sup>f* been there.
- (37) a. I showed Ian the letter *mys<sup>el</sup>f*.  
 b. \*I showed *Ian* the letter *hims<sup>el</sup>f*.  
 c. I showed *Ian* *hims<sup>el</sup>f* the letter.
- (38) *Mys<sup>el</sup>f*, I wouldn't kiss her. [emphatic use]

意味的観点からみると、主語名詞句と並列されている強調用法は、主語名詞句で表わされている人が、ある意味で重要人物であるものとして強調されて

いる読みと、述語で示されている行為をひとりだけ (without aid) で行なったという読みとで曖昧である。が、同じ強調用法でも当該代名詞がそれ以外のところであれば、それは副詞の読みしかない。他方、再帰用法には強意用法の読みはなく、単純に主語名詞句と照応しているにすぎない。

ここで、我々が今、問題としている中間態に相当する再帰態について考えてみる。まず、強勢についてみると、強調用法と類をなす。

- (39) a. Simple problems solve *themséives*.  
 b. \*Simple problems *sólve* *themselves*.

意味的にも再帰態の代名詞は強調用法と同じく、without aid という様態副詞の読みをもつ。ただし、他の様態副詞とは共起しないことには注意すべきである。

- (40) Foreign cars sell  $\left\{ \begin{array}{l} \textit{easily} \\ \textit{themselves} \end{array} \right\}$ .

- (41) a. \*Foreign cars sell *themselves easily*.  
 b. \*Foreign cars sell *easily themselves*.

しかし、この再帰態の代名詞は、移動の点で強調用法と異なり再帰用法に近い。また当該代名詞の省略可能性の点でも再帰態の代名詞は再帰用法と同じく省略できない<sup>10</sup>。したがって、以上のことから再帰態における代名詞は、強調用法と再帰用法の中間的性格をもつということになる。

(40)から再帰態と中間態との類似性は示されるが、再帰態の主語名詞句は、中間態のそれと同じく真の動作主ではないことに注目すべきである。この構文の主語名詞句に人物を表わす名詞句が生起しにくいことで証拠づけられよう<sup>11</sup>。また、再帰態の述語は、主語名詞句が他の物に影響を及ぼす外延的

<sup>10</sup> dress や wash などの再帰代名詞は、通例、省略可能であるとされているが、「一人で」着るという意を特に必要とするような文脈ではその省略ができない。したがって、一般にいわれている程には、再帰動詞の再帰代名詞の省略は自由で恣意的ではない、と思われる。

(i) Mother: Go upstairs immediately, and wash \*(yourself).  
 Daughter: Mother is dressing (?? yourself).

(ii) a. How long does it take you to dress \*(yourself)?  
 b. Jim isn't old enough to dress \*(himself).

<sup>11</sup> 再帰代名詞化の先行名詞句は、有生名詞句であるという感情移入 (Empathy) 説などと本



(extensional) 意味を表わすのではなく、むしろ主語名詞句の特性を述べるといふ内包的 (intensional) な読みを示す。総称文というものは、単一のその場限りの出来事ではなく、繰り返し行なわれる、あるいはその可能性のある行為に言及するのであるから、再帰態が総称的文脈を形成しやすいことはもはや明瞭であろう。

以上、総称文になりやすい構文として中間態と再帰態を考察してきたが、前に触れるところのあった tough 構文との類似性にも注目されたい。つまり、後者の叙述語の特徴をなす難易度を示す形容詞・名詞の類が、前者では副詞として現れているのである。

一方、中間態と再帰態を再帰代名詞消去という変形を用いて関係づけることが考えられるが、かなり無理があるように思われる。基底構造と考えられる (41) が非文であることと、(42) のように副詞ではなく、形容詞が生起する場合もあるからである。

- (42) a. Alabaster cuts very *smooth* and *easy*.  
 b. The meat cuts *tender* ( $\neq$  *tenderly*).  
 c. Mr. Howard amuses *easy*.

## 6. 時制・相

現在時制は、ある特定時に言及する必要はなく、一般的真理や主語名詞句の生来の傾向・気質、あるいは習性・習慣など規則的に行なわれる行為などを表わす。つまり、現在時制は不定的時制といってよく、総称文が、通例、単純現在時制と共起することから、これが総称主語名詞句の指示的不透明さを引き起こす総称的文脈を形成する大きな要因のひとつであることは、疑いない。が、ここでは、少なくとも表面的には、それが総称文であることの絶対的要件ではないことを指摘する。

例えば、(43) a のように、たとえ現在時制であっても、語用論的というと、青いトマトも存在するので、トマト全般というより特定のトマトに言及

---

稿で考察した再帰態で用いられる再帰代名詞の先行名詞句が非有生的であることは、一見、衝突しそうであるが、再帰態が能格表現の一種であることを考慮に入れると、この矛盾は解消されるように思われる。自動詞表現であるということは当然主語名詞句が自立的であることを意味し、その意味でこのような主語名詞句にはある種の擬人化が起っていると考えられるからである。

する読みが優先する。が、これに適切な修飾節が加わると、(43) b のような一種の定義文となり総称的になる。この when 節は、制限的關係詞節や条件節でパラフレーズできることからわかるように、主語名詞句の総称性を高めている。ちなみに、この時の定冠詞は、特定のではなく、後方照応的で、いわゆる限定的な (attributive) 用法である。

- (43) a. #The tomato is red.  
 b. The tomato is red when ripe.  
 c. A machine becomes rusty when it is not long used.

動詞の中には、状態・非状態で曖昧なものがあるが、総称文に生起しやすいのは、状態を表わす単純現在時制がもっともよく生起する。しかし、過去時制であっても、適切な一定の期間を表わす副詞句(節)が付加されると、総称的読みが優先してくる。(44) a が示すように、副詞句による期間が明示されていなければ、a dog という名詞句は、過去の文脈では総称名詞句になりにくい。

また、dinosaur という名詞句であれば、b, c のように、総称・非総称とで曖昧である。これには、名詞句の記述内容の一般性とその指示物がもつ歴史的事実とが関係してくる。しかし、これらの文脈に、かなりの幅のある時間を表わす副詞句(節)が添えられると、(44) d, e のように、総称的読みが優先してくる。

- (44) a. A dog *is* /# *was* a pet.  
 b. A dinosaur *ate* the leaves of the tall trees. (ambiguous)  
 c. Dinosaurs *ate* kelp.  
 d. A dog *was* a pet *in ancient times too*.  
 e. A book *was* a rare and valuable possession *before the invention of the printing press*.

ここで重要なことは、過去時制で総称的になりうる場合にも、現在への含みがある、ということである。(44) d では、too の存在により、「今もそうであるが、昔もまた」、というように現在の状況を前提としていることが了解される。(44) e では、同様のことが、before 節によって窺い知れる。(45) も、ドーデー鳥は、現在、絶滅しているが、昔はちゃんと存在していた、という一種の歴史的事実を表わしており、やはり、現在への関与がみられる。

- (45) a. A dodo *lived* on fish. (≡A dodo is no longer to be found.)  
 b. The sailor *was fond* of a dodo's egg.

進行相は、個別主語と共起する時、非総称の読みをもつのが普通であるが、大きな幅のゆったりとした時間の枠の中では、期間を示す副詞表現の代用をするので、総称の読みを生みだすことがある。

- (46) *The /φ/\*a/\*any beaver(s) is are increasing in number.*

以上、総称的文脈を形成する単純現在時制以外のいくつかの例を観察し、その要因を考えた。

## 7. 結 語

本稿は「総称文」の定義を試みたものである。そのために、まず総称名詞句の特質を明らかにし、ついで、トピックを示す、文頭に着目し、さらに、中間態・再帰態・*tough* 構文と関係づけながら総称的文脈というものを考察した。名詞句自体は、総称・非総称に関し、言語的には曖昧なので、総称文の決定は語用論の問題であることを指摘して本稿を閉じたい。

## 付 記

本稿作成の過程で、安井稔、中右実、原口庄輔の各先生、さらに武田修一、久保田正人の両氏から貴重なコメントをいただいた。安藤貞雄、古川直世の両先生には特に厳しいご批判をいただき修正をうけた。最終段階では伊藤弘之教授の細かなご指摘をうけた。これらの方々から心からの感謝を申し上げる次第である。

## REFERENCES

- Anderson, J. 1968. "Ergative and nominative in English," *Journal of linguistics*. 4. 1. 1-32.  
 Bolinger, D. 1980. *Syntactic diffusion and the indefinite article*. Reproduced by the Indiana University Linguistics Club.  
 Bresnan, J. 1981. "Polyadicity: part 1 of a theory of lexical rules and representations," in T. Hoekstra, van der Hulst & M. Moortgat eds. *Lexical grammar* 3. 97-121. Dordrecht: Foris.

- Bresnan, J. 1982. "The passive in lexical theory," in J. Bresnan ed. *The mental representation of grammatical relations*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Buysens, E. 1979. "The active voice with passive meaning in modern English," *English studies*. 60. 6. 745-61.
- Chomsky, N. 1981. *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.
- Dahl, O. 1975. "On generics," in E. L. Keenan ed. *Formal semantics of natural language*. 99-111. Chicago: The university of Chicago Press.
- DeCarrico, J. S. 1980. "A counterproposal for opaque contexts," *Linguistic analysis*. 6. 1. 1-20.
- Farkas, D. F. and Y. Sugiyama. 1983. "Restrictive if when clauses," *Linguistics and philosophy*. 6. 225-58.
- Fiengo, R. 1974. *Semantic conditions on surface structure*. Unpublished doctoral dissertation. Cambridge, Mass.: MIT.
- . 1980. *Surface structures*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Fraser, B. 1974. *The verb-particle combination in English*. Tokyo: Taishukan.
- Goldsmith, J. and E. Woisetschlaeger. 1982. "The logic of the English progressive," *Linguistic inquiry*. 13. 1. 79-89.
- Herschensohn, J. 1980. "Genericness and intensionality," in W. Harbert & J. Herschensohn, eds. *Cornell working papers in linguistics*. 1. 93-102.
- Ioup, G. 1975. *The treatment of quantifier scope in a transformational grammar*. University Microfilms International.
- Jackendoff, R. S. 1975. "Tough and the trace theory of movement rules," *Linguistic inquiry*. 6. 3. 437-64.
- Jespersen, O. 1909-49. *A modern English grammar on historical principles*. 7 vols. London: George Allen & Unwin.
- . 1924. *Essentials of English grammar*. London: George Allen & Unwin.
- . 1933. *The philosophy of grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Kennedy, A. G. 1967. *The modern English verb-adverb combination*. New York: AMS Press.
- Lasnik, H. and R. Fiengo. 1974. "Complement object deletion," *Linguistic inquiry*. 5. 535-72.
- Leech, G. N. 1971. *Meaning and the English verb*. London: Longman.
- Lyons, J. 1968. *Introduction to theoretical linguistics*. London: Cambridge University Press.
- Lysvåg, P. 1975. "Verbs of hedging," in J. P. Kimball ed. *Syntax and semantics* 4. 125-54. New York: Academic Press.
- Palmer, F. R. 1965. *A linguistic study of the English verb*. London: Longman.
- Postal, P. M. 1971. *Crossover phenomena*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Poutsma, H. 1962. *A grammar of late modern English* 11. P. Noordhoff: Groningen.
- Quirk, et al. 1972. *A grammar of contemporary English*. London: Longman.
- van Oosten. 1977. "Subjects and agenthood in English," *CLS*. 13. 459-71.
- Yasui, I. [安井 泉] 1983. 「英語の受動文について」『言語文化論集—開学10周年記念特別号』15, 筑波大学現代語現代文化学系。

## Notes on Generic Sentences

Kiyoshi FUKUZAWA

In this paper I will consider the status of so-called generic sentences (hereafter, GSs) in the system of English grammar. Strangely enough, the definition of this type of sentence cannot be found in the literature. To define it, I first examine the properties of the generic noun phrases (hereafter, NPs). These NPs are inherently-known items in semantics and show old information in functional structure. Therefore, they often occur at the sentence-initial position. But this does not imply that they do not appear at the non-subject position syntactically, as shown in example (1):

- (1) John is writing an article on *the beaver*.

The sentence-initial position normally shows *Topic* or *Theme* in the relevant sentence. Thus, object NPs, for example, which usually show non-universality, can be generic once they are moved sentence-initially:

- (2) a. Robins build *nests*. [-universal]  
 b. *Beavers* people seldom eat  $\phi$ . [+universal]

Note further that the individual members constituting the generic NPs are non-specific (i.e. referentially opaque) in spite of the fact that they are definite in themselves. This fact demonstrates the non-genericity of the following sentences:

- (3) a. *The sun* rises in the east.  
 b. *The Ohio River* flows into the Mississippi.  
 c. *Rome* stands on the River Tiber.

Examples like (4) are also non-generic because the subject NPs are non-generic:

- (4) a. *Few birds* swim.  
 b. *Some tennis balls* serve better than others.

It follows that GSs should have generic subject NPs, and their predicate phrases must show the general properties of these subject NPs. As such sentence types, we examined *middle voice*, *reflexive voice*, and *tough* construction in detail.

- (5) i) a. *Grass* grows well.  
 b. *Pine* saws well.  
 ii) a. Wool rugs clean *themselves*.  
 b. Foreign cars sell *themselves*.  
 iii) An elephant would be *easy* to kill  $\phi$  with a gun like that.

These constructions can be generic because they show the properties of the subject NPs. I suggest that GSs may depend on pragmatical factors because of the subject NPs' ambiguity with genericity.